

ボート、カヌー、板合せを使用した
通船川清掃、親水活動報告 2010

2010年 12月

特定非営利活動法人 新潟水辺の会

代表世話人 大熊 孝

新潟市地域活動費補助金を受けて実施しています。

通船川再生に向けて 2010

通船川再生の活動として始めたボートを使った毎月の川清掃も4年目となりました。始めた当初は3名程度から始まりましたが現在2艇のボートで8名～10名の参加者を得るようになっていきました。また通船川沿川企業の川掃除への参加も始まり今後の展開が楽しみな状況になっています。ようやく川の水質の環境基準の改正や筏の河川占用の見直し、ヘドロの浚渫、工業専用地域の特例下水道整備という通船川特有の課題解決への道筋を議論できる状況へ一歩近づいたという印象です。また日常的な川親水活動も現実的に考えることが出来る状況となり始めています。今年には5回の一般人を迎えてボート、カヌー、板合せに乗り、楽しむ機会が出来ました。これからはその機会を日常的に実現することが求められています。

川を愛で、川再生に関わる人々が川に集まることは『通船川は産業の川である』という一方の思い込みと川遊び、そして自然環境とどう折り合いをつけることができるのかという21世紀の本質的な議論と実験の舞台としての体裁を整え始めることに他なりません。通船川河口の森を拠点とする広がる川舟運の調査環境やカヌー川下りの条件も整い始め様々な課題が見えながらも、『さあて、今日も川掃除に出かけるかあ』と自分自身に喝を入れると共に舟のエンジンに火を入れています。



通船川案内図

河口の森： 通船川清掃ボートの基地、緑地

第一、第二貯木場： ベニア板製造用丸太筏を浮かせている木場

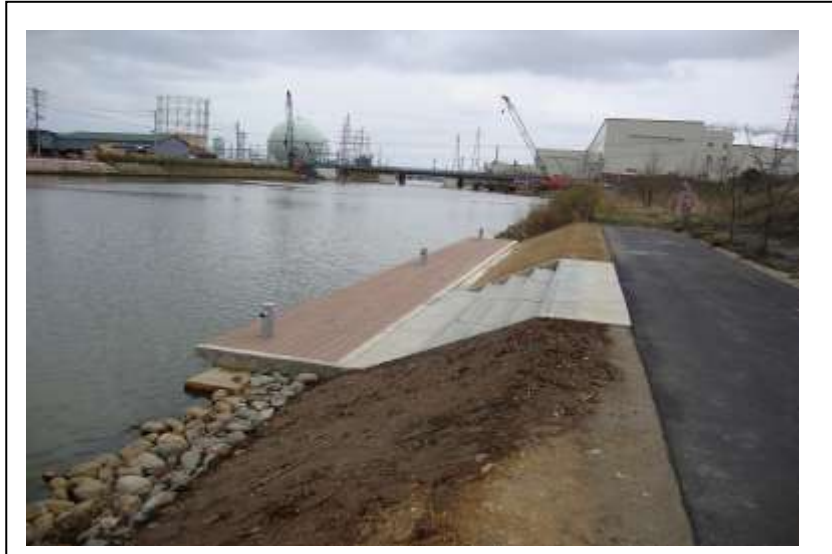
山ノ下閘門、津島屋閘門： 地盤沈下で東区一帯の自然排水が出来なくなった事から通船川の水位をポンプで強制排水して下げ、流域排水と舟の通過と両立させている施設。

栗の木川： 新潟市東区、江南区の田圃、都市排水路

通船川清掃 4月7日

参加人員 当会 10名、木材関係業界 11名

清掃場所 焼島橋～通船橋間



平成 22 年 3 月、当会活動拠点である通船川河口の森に河川管理者によって船着場が完成しました。巾 1.8M、長さ 20M の本格的なものです。これからの楽しみです。



川に筏を浮かべている木材関係業者が始めて当会の川掃除に参加しました。この状況をどう発展できるかが鍵となると思います。



初めて川清掃に新住民を含めて 10 人となりました。これからの楽しみな状況となってきました。

通船川清掃 5月8日

参加人員 当会 8名

清掃場所 第二貯木場向い左岸



第二貯木場向かいの左岸。ここには上流からのゴミが水草に絡みつきゴミが集まる場所になっています。しばらくここに通はなければならないようです。



清掃舟が2艇になりました。2艇目の頑張り過ぎが気になります。



会員の他、住民、企業、市職員など多彩な顔ぶれになってきました。

通船川清掃 6月12日

参加人員 当会 8名

清掃場所 第二貯木場向い左岸



先月と同じ場所。
川底が浅く、ドブ臭さ
で鼻と目が腐ります。



川の中にあつた FRP
浴槽を鉤で回収しま
した。半分泥に漬か
り、重くて往生しま
した。



ゴミが多いのは嬉し
いのか、悲しいのか判
らなくなります。

通船川清掃 7月 10日

参加人員 当会 9名

清掃場所 第二貯木場周辺



今年の撮影で一番気に入っている一枚。川掃除の力強さに溢れています。



7月の川風は頬に気持ちよく、川掃除もまんざら捨てたものではないと思います。これをみんなに分けて上げたいものです。



これだけ集まってもらい感謝です。手に持っているのは冷たい麦茶でした。

小阿賀野川下り試行 7月 17日

参加人員 当会 5名

活動場所 満願寺閘門～通船川河口の森往復



今月購入した 12 人乗りボート、清流回復 3 の試運転をかねてカヌー4 艇を曳航し、信濃川を溯上、小阿賀野川満願寺閘門に向う。



満願寺閘門から小阿賀野川をカヌーで下る。カヌーに乗りながらのカメラ撮影は難しい。パドルを川に流してしまいました。初めての経験で疲労困憊でした。



万代橋を越えて通船川船付場に帰る。無事に帰れて良かった。2 回目に挑戦するには少し時間がかかりそうです。

信濃川カヌー下り試行 7月 31日

参加人員 当会 5名



12人乗りボートが入手出来、信濃川に進出。免許取得者も増えこれから何が出来るかの試行中。信濃川は以外と賑やかです。



ボートに曳航してきたカヌー2艇で関屋分水からの川下り。信濃川は通船川と違い新潟を代表する川でした。転覆しないようにゆっくり下ります。



これから広く新潟市民にカヌー下りの機会を提供できるように準備したいと思います。

通船川清掃 8月8日

参加人員 当会 3名、
清掃場所 大仏橋周辺



川清掃舟に舟の性格を表示する旗を取付ました。舟が見違えるようになりました。



8月になると水草も繁茂し、ゴミ掃除も大変です。



今日は色々なイベントと重なり、残念な結果でした。お二人には感謝申し上げます。

小阿賀未来の会との川連携 8月7日

参加人員 当会 4人、小阿賀未来の会 30人

遊び場所 阿賀野川、小阿賀野川、信濃川



満願寺閘門を通過し、阿賀野川舟付場でお客を乗せる大板合せを見守る。



小阿賀野川の静かな静かな川下り。新潟市にもこんなところがあることに驚きます。小阿賀野川舟歌を聴きたいものです。



ねじり鉢巻は造船所の社長さん。元気です。



集合記念写真。遠すぎて誰やらわかりませんが昔ながらの風景が蘇る想いです。



当会カヌーも川下りにお付き合い。小阿賀野川にはもっと遊びに来る機会を作りたい。



帰りの途中に信濃川源流から下ってきた小学生に遭遇。タイヤの筏に乗って元気です。みんな元気に育って欲しい。

通船川イベントに参加 8月22日

参加人員 当会 8名

通船川中流域、新松崎



舟運調査舟、川掃除舟、カヌー、板合せなどで参加。川遊びが出来る川になり始めていることに感謝。



子供を乗せて緊張の当会副代表。その緊張をよそに子供達は浴室の椅子に大騒ぎ。



今年初めて近くのお父さん、お母さんと小さな子供達も乗船。この舟なら大丈夫かなと思ってもらったのなら幸いです。



新潟の伝統和船、板合せを漕ぐ飛び入りのお父さん。後日会員になってもらいました。



あまり綺麗とは言えない当会川清掃舟、『清流回復1』に乗ってご機嫌な皆さん。



暑い8月の日でしたがみんなに喜んでもらえたことで取合えず満足。10尺の櫂もこれから活躍できる環境を作りたい。

通船川清掃 9月9日

参加人員 当会 9名、

清掃場所 津島屋閘門～山ノ下閘門



久しぶりにあった河川区域の筏の周りのゴミ拾い。筏の河川占用の妥当性と業界の川清掃義務化をどうするのかは今後の課題ということにしておきます。



川に流入するゴミをどうやって制限できるかも今後の課題です。



少しずつ顔ぶれが変わり、すそが広がることで持続する川掃除。この作法は今後の河口の森復元でも適用可能な手法となればと期待しています。

通船川清掃 10月9日

参加人員 当会 7名

清掃場所 津島屋閘門～山ノ下閘門



雨の中、少し息切れがして来た川掃除です。しかしここが頑張りどころだと思います。川掃除から始まる結果を残すにはもう暫くの臥薪嘗胆の時を耐えたいと思います。



ゴミの陸揚げ風景。毎月こんな風にしてゴミをゴミ箱に運んでいます。足場が悪く滑ります。



雨風にたたられた川清掃でしたが予定通りできたこと、あらたな見学者、参加者が参加したことなどに力づけられています。

通船川清掃看板設置 9月



この看板は川掃除を新潟市の一つの文化とし、市全体の問題とするための一里塚です。



内容をご確認ください。

川ゴミのための川ゴミ仮置き場

この場所は川ゴミを集積する「仮置き場」です。

家庭ゴミや産業廃棄物などを置かないで下さい。私たちが舟で川の中からゴミを拾い集め、運び、この場所に仮置きするために設置しています。

この川を利用する者は川を美しく保ち再生させ、次世代に相続しなければなりません。春秋の裏にゴミ袋を用意しました。川ゴミにお気づきの方は絶ってここに書いて頂ければ幸いです。

川清掃舟は毎月第二土曜日午前9:00に出航。川ゴミを全て回収いたします。川ゴミは回収の時間まで、回収の裏に置いてください。回収の裏に書いて頂ければ幸いです。回収の裏に書いて頂ければ幸いです。

美しい水辺に乾杯！
 設置者：財団法人 新潟水辺の会
 世話人（総そうじ船長）横山 謙
 連絡先 090-7907-6028
<http://www12.plala.or.jp/wisubetokai/>

通船川清掃 11月13日

参加人員 当会 5名

清掃場所 薬師橋下流



葦の中に隠れているゴミを掻き出し、回収するのは大変です。こういう場所は舟でなければ出来ません。



足が立つ所では川に降り立ってのゴミ回収です。ゴミ回収の当初からのメンバーですがいまだに付き合ってもらっています。感謝！



みんな生きることにより忙しく帰ってしまい、寂しい確認写真となりました。こんな時もあります。

県地域振興局主催水辺愛護会の通船川見学、11月21日（日）

当会参加人員当会5名、見学者34名

河口の森より松崎橋往復



河口の森船着場から3艇のボートに分譲し出発。好天に恵まれました。



清流回復3の初めての運行写真です。通船川見学、川遊びに今後活躍が期待されています。



川底に溜まるヘドロからメタンガスの泡立つ製紙会社の排水路を見学してこれから通船川を遡る。正面は新山ノ下ポンプ場。

水辺愛護会見学2



近くの万代高校の女子を乗せて元気な安田船長。



きたない川でも元気なポーズを取る高校生と見学者。
ボート船首は修理します。



川風で天気は好くとも少し寒く感じた通船川見学でした。これからも通船川と親しむ仕掛けを作ってゆきたいと思います。

通船川清掃 12月11日

参加者 7名

清掃場所 第一、第二貯木場近く



遠く飯豊の白くなった山並みを見ながらの川掃除。昔の人もこうして見ていたことを思うと変わったのは人の心とゴミの量だなあと思わずにはいられませんでした。



川のゴミは賽の川原。いつまでも『シジュフォス』を気取ってられないのでゴミ削減の社会合意に向けて動きだしたい。



今年最後の川掃除でした。来年春までお休みですがこの冬、5年目に向けて川掃除をどう持続し、展開させるかを考えたい。

1 通船川清掃・親水活動の成果と集計

清掃日 活動日 時間AM9:00 ~12:00	天気	参加人員	清掃場所 活動場所	ゴミ収集成果	使用舟
4月7日	晴れ	10人 木材関係11人	焼島橋~ 通船橋右岸	ゴミ袋90+(木 材関係)70	かもめ丸
5月8日	晴れ	8人	第二貯木場向い	ゴミ袋75 木材屑	かもめ丸 清流回復1
6月12日	晴れ	8人	第二貯木場向い	ゴミ袋60+(木 材関係)40	清流回復1 かもめ丸
7月10日	晴れ	9人	第二貯木場周辺	ゴミ袋30+(木 材関係)20	かもめ丸 清流回復1
7月17日 小阿賀野川下 り試行	晴れ	5人	通船川河口の森~ 小阿賀野川満願寺 閘門往復		清流回復3 カヌー4艇
7月31日信濃 川カヌー下り 試行	曇り	5人	関屋分水から 万代橋まで		清流回復3 カヌー2艇
8月7日 小阿賀未来の 会との連携川 下り試行	晴れ	当会4名 未来の会40名	満願寺閘門より 小阿賀野川を下り、 能代川合流部まで		清流回復3 カヌー2艇
8月8日	曇り	3人	泰一貯木場~第二 貯木場	ゴミ袋20+ト 口箱7個	かもめ丸
8月27日 大形自治会と 親水活動	晴れ	8人 住民子供55人	新松崎、大形地内		清流回復1 清流回復3 板合せ1艇 カヌー2艇
9月11日	晴れ	9名	津島屋閘門から川 下り清掃	ゴミ袋70	清流回復1 かもめ丸
10月9日	少雨	7人	津島屋閘門から川 下り清掃	ゴミ袋30+(木 材関係)30	清流回復1 かもめ丸
11月13日	曇り	5人	薬師橋下流	ゴミ袋60 タイヤ6個	清流回復3 かもめ丸
11月河口の森 葛伐採、薬殺		8人	焼島橋下流左岸、 河口の森	草刈機、ザイト ロン使用	
11月21日 水辺愛護の会 見学会	晴れ	5人 見学者34人	河口の森から松崎 橋往復2回		清流回復1 かもめ丸 清流回復3

12月11日	曇り	7人	第一貯木場から 第二貯木場	ごみ袋 85 個 タイヤ 1 個	清流回復 1 かもめ丸
集計		川清掃 77 人 親水活動 27 人 森作業 8 人 一般参加者 129 人		ゴミ袋 707 個 タイヤ 7 個 FRP 浴槽 1 個	

1-1

清掃場所確認



以上、今年の清掃活動は第一、第二貯木場周辺を中心に作業を行いました。清掃参加者は昨年に比べて暫増、回収ゴミは企業参加もあり、1.6倍の増という結果でした。今年の成果は通船川沿川企業の清掃参加が定着し始めていること、川清掃舟が2艇となり格段に運動、回収能力が増したことです。また通船川の筏が業界の自主判断で川から削減されていることでした。この結果川面の水面が確保され、ゴミ回収が容易になっています。これを一時的なものと思わず、川利用の社会合意にむけた一歩としてゆきたいと考えています。しかし……川清掃はきつい作業ではありませんが面白い作業でもありません。今まで誰もやらなかった理由が今ではわかります。それは徒労に近い作業だからでした。それはあたかも神から罰せられ、永遠の徒労を命じられたシジュフォスのようなものだったからです。シジュフォスなら耐えられますが、私のような凡夫には耐えられないのです。これをそのまま次世代に伝承することはできません。ブリュウジュの川清掃人は観光事業の裏方として紹介されていました。徒労の川掃除からまあしかたがない川掃除へと転換出来なければ持続可能な川掃除、川文化にはなりません。その展開をどうするのが5年目の大きな課題になり始めています。住民による川掃除の社会認知への道は川の住民管理の問題とあいまって地域主権の主権者とは誰かという未経験の課題でもあるのです。

1-2

親水活動状況



今年の6月、大成建設自然環境基金と日本財団の活動助成を受けて船長8.4m、巾2.3m、12人乗りの大型船外機舟を導入できたことで運動能力が格段に向上し、久しく念願していた小阿賀野川カヌー下り支援、日常的な川親水活動、舟運回復調査を実施する基盤が整い始めています。 『通船川河口の森に設置された舟付場と新艇、清流回復3』



今年も12人乗り船外機舟による川カヌー下り支援、親水活動支援の試行を重ねると共に操船練習、落水事故対策と救助演習準備の年となりました。小阿賀野川、通船川、信濃川で会員以外の一般人とのカヌー下り試行、舟遊び支援を数回行い、次年度の本格的な運用の条件について検討を始めています。川を掃除し、親しみ、川という自然と共存する21世紀の川文化の姿を構想する前段が整い始めています。

2 川掃除と川ゴミ削減、河川水質環境基準改正

川ゴミ清掃の継続で川ゴミが減らない現実と更に川の河川水質の環境基準の改正がなされない歴史と裏表の関係にあることに気がつきます。それは通船川が隠然とした廃棄物処分場であったし、今も尚その歴史は変わっていないという事実なのでした。通船川にゴミが溢れ返ったままにしておくことも川を汚したままにしておくことも実は誰の責任でもなく、私達自身の要求であり、私達自身の姿を表していることに他ならないのでした。そんな状況下、この状況に事実上の異論を実行する川掃除を継続してきたことで変わってきたことがあります。それは《通船川には川掃除人がいる》ということの社会認知です。それはまだ釣り人、周辺企業に留まっていますがそのことは《関係者でありながら自分達は川掃除をしない！》という正当性、妥当性の説得力を失うということです。《川掃除人》から『君達は川を使用する資格がない』と言われても説得力のある反論が出来ないということです。様々な言い訳はあるでしょうが川にゴミが溢れていることも川が汚染されていることも事実だからです。『通船川は廃棄物処分場である』ということならば川掃除も意味がありませんが今時、川が廃棄物処分場であるということが社会的に許されるものかどうかは事実だけが語るでしょう。

川掃除は細いながらも道筋がついてきました。川ゴミを削減する手法も見えてきました。それは川に流入する雨水排水路にオイルフェンス、網を設置し、ゴミ揚げなどの管理を管理者及び近隣住民の義務とすることです。排水路にゴミが溢れることはそこに住む住民の責任と言えるからです。その義務を拒否するのならその排水路を閉鎖することも検討できるでしょう。まあそこまですることが妥当なのかどうか、又そこに至るプロセスもより柔軟い手法も検討されなければなりません『川の姿はそこに住む住民のレベルを表している』ということは変わらぬ真実です。

更にもう一つの問題である河川水質の改善を現実日程に上げたいと思います。通船川の河川水質環境基準を決めているのは新潟県です。その決定要因は現在の土地柄、排水浄化技術水準、下水道整備状況、そして民度、ということだろうと思います。しかしそこには『川掃除』、『川遊び』の状況は無かったと思います。そこに『相続すべき明日』を加えて『現在の土地柄、排水浄化技術水準、下水道整備状況、そして民度、川掃除、川遊び、相続すべき明日』を枠組みとした議論が現実味を持ち始めていると思います。この議論の枠組みを作り始めたいと思います。それには新潟県、新潟市、業界、住民の参加による『通船川、栗の木川下流再生市民会議』での議論の展開が一番正当性、妥当性を持っていると思います。会議が茶話会に墮し、再生への具体的な目標を議論、設定出来なければ存在理由の大きな部分を失うと思います。喉から心臓が飛び出すほどの緊張の中からはしか開けない展望もあるのです。会議運営者の猛省を促したい。ちなみに私は通船川、栗の木川の水質環境基準 D,E 類型を底上げし、魚が生き、繁殖できる最低基準である C 類型に改善したいと考えています。その妥当性、正当性の議論を官・業・民で始めることを川清掃人の一人として強く求めたい。それが川再生の第二ラウンドとしてふさわしい課題であり、川と人の中の人との活動の限界を定める基準になると考えます。

3 川親水活動の事業化

『めしの種』という言葉があります。この言葉の説得力の前に多くの反論は説得力を失ってきました。急激に変化する 21 世紀を向えその説得力は益々高まっているように見えます。『川掃除、川遊び、相続すべき明日』もその前では有効性を失うかに見えます。川を汚染し、日常的に川ゴミをばら撒きながら生きてきたということは善悪を超えて歴史的な事実であることをとりあえず認めます。なぜならそれは『めしの種』だったからです。

『そこまでしなければ生きられぬ人に果たして生きる価値があったのか?』という根源的な問いは当面判断を留保しておきます。しかしこの圧倒的な説得力に私達はいまだに説得力のある対案を提示することが出来ないでいます。私達の川掃除から始まる川再生が新たな人の生きる糧となりうることを示すことができなければいつまでも『ぼくちゃんの遊び』、あるいは『暇人の暇つぶし』と評価され続けます。川再生の分水嶺は『通船川再生理念 2010』の立派さにあるのではなく、川再生から始まる新たな《人の生きる術》を具体的に示すことにあります。そのことはいかなる言葉よりも人々に説得力を持つからです。たとえ小さな可能性でもいいのです。その説得力のために新たな川事業は始めなければならぬと考えています。

具体的にどんな展開が可能なのかは私達の力量もあり、施設の問題もあり、舟が足りないという限界もあり、赫々とした成果を今すぐ望むことはできません。しかしいまある環境条件の中で最善の手法とは何かを考え、実行に移すことはできます。そのことで絶対的な説得力を持つ『めしの種』に揺さぶりをかけることは出来ると思います。その最初の一步を始めるために『新艇、清流回復 3』は運行を始めたいと思います。2010 年、清流回復 3 を使用した川親水活動が 5 回ありました。2 回の小阿賀野川カヌー下り支援、1 回の信濃川カヌー下り支援、新松崎での舟遊び、県主催の水辺愛護会通船川遊覧がそれです。これらの実験はそれぞれ新たな川事業のヒントを与えるものでした。この中から何を取り出し、新たな川事業を構想するかが 2011 年にかけての大きな宿題となりました。

4 河口の森復元と沿川植樹

『緑滴る通船川河畔林』と言い始めて 20 年が経ちます。街の中に公然とした側溝しか持てないのはいかなる言い訳をしようが恥ずかしい言い訳に過ぎません。恥ずかしい川には恥ずかしい街と人がふさわしく、そこに文化は育たず、失意の中で人々が離れて行くのを止めることができません。『緑滴る通船川河畔林』はこの失意の状況の対案として構想されました。街の中にある『緑滴る河畔林のある川』はそこに住む住民の川に対する親しみと愛情の歴史を語るものであり、その川辺に住むことの誇りを語るものです。

しかし『河川区域の植樹制限』という規則?によってその実現を阻まれてきました。その根拠は川辺の木が堤防を弱め、破壊するからというものです。また堤防上の木の責任は誰が取るのか不明だからというものでした。この根拠のいかにわしきは技術が文化を支配することをあたかも当然であるかのごとく語っているからであり、豊かな景観を作り出そうとする志を感じさせないことにあります。技術は豊かな文化を支えるためにあり、通船川再生は人と川を繋ぐ様々な活動と自然との共生という 21 世紀の課題を含むものであるという常識に立ち返りたいと思います。通船川沿川植樹の社会合意と管理体制樹立にむけて再挑戦を始めたいと思います。

それと共に河口の森復元が当面の課題になっています。焼島橋架け替えに伴う新潟市の補償復元の内容を巡って現在議論が進められています。当会も復元に向けて苗木再植樹の

準備を始めています。しかし今、かつてのワークショップで問題にならなかった河口の森の性格と管理を具体的に構想し、社会合意をする時になっているように思います。川が排水路から川へと姿を変え、維持されてゆくにはそれなりの人のエネルギーとコストが必要です。更に川を『治水、利水、環境』の対象としてきた従来の哲学から川の自然と共存する哲学への転換と社会合意が不可欠です。その嚆矢としてうやむやにしてきた河口の森の管理主体を周辺住民とし、河口の森の性格を川の自然環境保全林としたいと考えています。植樹して7年、藪のなかで雉のつがいが住み始めています。鴨が卵を温めています。舟付場のすぐ近く、緑があり、人が立ち入らないだけで野生は戻るのでした。

『街の中に、野生が住み、繁殖する場を惜しみながらも与えよ！』

これが人と自然の共生の出発点です。そして人が21世紀を生き延びるための条件なのでした。これが2010年の現在、社会の共通合意になっているとは言えませんが通船川で始める意義はきわめて大きい。川の駅近くの川森に住み始めた先行種としての雉と鴨と、その生存を保障し再び川の守護神として甦る弁才天は共々21世紀の文化装置として誇るに足るものになると信じます。工業排水路から緑が滴る川森の中で野生が復活し、再生した川で遊び、稼がせてもらう人の姿はまさに21世紀の一つの誇るべき姿になると思います。

5 通船川の過去の清算のための序章

川掃除5年目に向けて、10数年に渡る通船川再生活動の中で語られることの無かった課題を語りたい。それは見えないゴミ、川底のヘドロ浚渫です。この課題は余りにも人に与える影響が大きすぎて、日本の900兆円の借金と同じで直視できない課題であったからでした。しかしいずれ900兆円が日本人の頭に落ちてくるように通船川のヘドロは未来永劫新潟市東区の負の遺産として、新潟市の足を引っ張り続けることは明らかです。『ヘドロの街新潟』はけっして『ここで死んでもいい町』にはなれないからです。不毛の地東新潟のおぞましきから抜け出す道は20世紀の負の遺産を正面から直視し、ヘドロの回収と通船川再生を新潟市の課題とするほかありません。新潟市は現在その気がないようなので一案を提示し、建設のための公共事業ではなく、再生のための公共事業のプランを検討してもらう材料としたい。

0 河川水質の改善

ヘドロを浚渫しても排水汚染が続いているままでは更にヘドロの堆積が進み、浚渫の意味がないことから、ヘドロの発生を抑え、分解を促進する研究、排水改善の研究、河川利用の改善などの前段があり、その合意から始めたい。

1 ヘドロ埋設量

ヘドロの推定埋設量は通船川全域と栗の木川下流域を含めて25万 m^3 とされています。1999年新潟大学工学部調査。

2 ヘドロ処分地

第一貯木場を廃止し、処分地とする。第一貯木場の面積77,000 m^2 。ヘドロ全量を第一貯木場に堆積すると単純計算で $250000/77000=3.2\text{mH}$ のヘドロ堆積高さとなる。後

地利用は今後の課題としたい。これが実現するために既存の製材工場の移転が課題になります。すでに東港への工場移転の実績があり、実現不可能という課題ではないと思います。

3 浚渫費用と負担割合

25 万 m³の浚渫費用については資料がなく、新潟県等実績があり、それを参考にする。問題になるのは浚渫費用負担割合です。河川管理者である新潟県、河川利用者としての新潟市、業界、住民の汚濁負荷累計を推定し、社会合意の後、費用負担を決定する。汚濁負荷累計については新潟市が汚染管理をしていることから推定が出来ると考えます。費用負担を税金でやるのか、身銭を切るのか最大の課題になることが予想されますが『自分のケツは自分で拭け』という原則に立てば身銭を切らせる手法が一番説得力を持つとおもいます。

以上、通船川再生へドロ浚渫プラン（案）の一案を提示しました。これは一案に過ぎず、様々な検討がなされるべき課題ではあります。ただこの課題に沈黙したまま通船川再生を語るのは偽善を禁じ得ません。実現可能な手法のための議論が沸騰することを期待します。

6 川再生の志の伝承のために

以上、川掃除 4 年目の実績と 5 年目の課題を書き連ねてきました。得たものもありますが失ったものもあります。それは時間です。『みんな歳を取った』と北越製紙の若者が語っていました。通船川再生が語られ始めてすでに十数年、夢だけが大きく、得たものはその夢の数分の一だったのではないのでしょうか。夢を語ることの偽善と空しさを感じ続けた十数年だったように思います。

これではイカン！と思い始めた川掃除も大きな課題に打ちあたっています。それはこのままでは川再生の志と行動が次世代に伝承、相続されないだろうという危機感です。残念なことですが私達はこの視野と方法を持っていなかったように思います。私達の行動と展開が自分達の満足のためだけのものでしか無かったならば初めから負けは決まっています。なぜなら官も業も相続体制を持ち、当方にはそれが無いからです。その事実気づいたことから次世代への志の伝承装置として船小屋は構想されました。単にカヌーを収める小屋ならばカヌー遊びは出来るでしょうが川掃除も河口の森の管理手法も伝承されません。21 世紀の自然との共生の課題は単純な論争で終わることはなく、絶えまない開発圧力に抵抗し、共生水準を維持し、それを広げてゆくための持続する志の伝承とそれを可能にする基盤の相続が必須の条件だからです。船小屋がカヌー艇庫の機能に留まらず、川掃除、水質監視、川紹介、川湊の機能が必要とされる所以です。そのことが出来て初めて官・業に同等にモノを言い続ける場を設定することができる当事者たりうるからです。船小屋の性格を巡って暫く、行きつ戻りつがあるでしょうが川清掃人として引くことのできない水準があることを宣言しておきます。一言で言うなら『船小屋は川再生の拠点でなければならない』ということです。通船川は新潟市の小さな川ではありますが 20 世紀をそのまま体現した川であることでこの川の再生は多くの川の再生モデルとなるものです。暗いトンネルを越えたところで次世代に川再生のバトンを渡せるために今暫く自分自身の羅針盤に従って進むほかないようです。

7 2011年活動計画

日時 集合時間 AM8:30	集合場所は通船川河口の森 船着場	予定人員	備考
4月9日(土)	親水活動、通船川津島屋閘門から 山の下閘門までカヌー下り	10名	
4月10日(日)	川掃除	10名	昼飯付
5月14日(土)	親水活動、4月と同じ	10名	
5月15日(日)	川掃除	10名	昼飯付
6月11日(土)	親水活動、信濃川関屋分水から 万代橋までカヌー下り	10名	
6月12日(日)	川掃除	10名	昼飯付
7月9日(土)	親水活動、6月と同じ	10名	
7月10日(日)	川掃除	10名	昼飯付
8月6日(土)	親水活動、6月と同じ	10名	
8月10日(日)	川掃除	10名	昼飯付
9月10日(土)	親水活動、6月と同じ	10名	
9月11日(日)	川掃除	10名	昼飯付
10月8日(土)	親水活動、6月と同じ	10名	
10月9日(日)	川掃除	10名	昼飯付
11月13日(日)	川掃除	10名	
12月11日(日)	川掃除	10名	打ち上げ

2011年の自主活動計画日程を以上のように決めました。それぞれの内容についてはこれから検討します。親水活動の事業化、川掃除の新たな展開、船小屋建設など重要な課題がありますがこれらの活動を継続実施することで道は開けると思います。

終わりに最近読んで感激し、無為自然を語った老子の言葉を伝えたく、転記いたします。

上善若水 水善利万物而不争 処衆人之所惡 故幾於道

上善は水のごとし。水は善く万物を利して争わず、衆人の憎むところに処る。故に道に近し。

++++
 新潟水辺の会 通船川清掃人 横山 通
 950-0116 新潟市江南区北山861番地
 電話 090-7907-6028, 025-276-2254
 EMail yokoyama.tooru@cameo.plala.or.jp
 ++++